

---

# **金髪巨乳はお嫌いですか？**

晴丸

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

金髪巨乳はお嫌いですか？

### 【Zマーク】

Z9220Z

### 【作者名】

晴丸

### 【あらすじ】

金髪巨乳の美少女と、どうにでもいる少年のお話。

本作は第1回GA文庫短篇部門に投稿したものを改稿したもので  
す。

駅前のロータリーに謎の少女がいた。

高校一年の三月、明日から春休み　つまり今日は今年度の終了式。僕はいつものように学校の最寄り駅の駐輪場に自転車を止めて、学校行きのバスへ乗るため駅前のロータリーへと向かつた。

そこに謎の少女がいた。

正確には少女ではなく、美少女で、謎の、というか外国人の女の子なんだけど。

おへそが見えるくらいの丈の、胸元が強調されたタンクトップに、膝丈のデニム。背中にショットティングリュックサックはいついんだけど、それがまた外国人らしさを出していた。

そんな金髪美少女が駅前のロータリーにいたのだ。

朝の通勤、通学ラッシュの波の中で彼女の姿は浮いていた。彼女の周りだけ人がいないせいもあるだろう。道を尋ねたいのだろうか、彼女は通りかかる人に話しかけようとしているが、みんな無視を決め込んで足早に通り過ぎていく。

しかし、みんな彼女のこととは意識していて、僕と同様にバスに乘る人や駅の改札から出てきた人たちとは、ごつた返す人ごみの中、ぽつかりと空いた空間にいる彼女のことをじっと見つめていた。しかし決して足を止めることなく進んでいく。

みんなが足早に通り過ぎるなか、僕はただひとり立ち止まって彼女のことを見つめていた。

……正確に言うのなら、僕が見つめていたのは彼女の身体の一部……胸元、つまり、おっぱいだ。僕は彼女のおっぱいを食い入るように見つめていた。

ソレは、衝撃だった。

胸元が強調されたタンクトップ、といつたがそれは間違いだつた。彼女の圧倒的な胸がタンクトップを押し上げて、さらに、柔らかいであろうソレがむにゅっとはみ出していて、そんな風に見えてしまつたのだ。

そして、二つの突き出したソレはみ「」となブラックホールを形成していた。

そのブラックホールを人類は谷間、と呼ぶかもしれない。  
しかし否。否、否、否！

あれは谷間、なんて言葉に收まりきるものでは到底ない。彼女が動くたびに大小さまざまに形を変え、見るものすべての視線をいざなうソレは、抗いがたい吸引力でぼくらの視線だけでは飽き足らず、手や頭までも吸い込もうとするのだ！……吸い込まれてしまつたら最後、冷たい檻の中へと収容されこちらへと戻つてくることは出来ない。

いや、なんとも恐ろしい！ 恐ろしい！  
だが、だからこそ、ブラックホール。

いや、すばらしいおっぱいは凶器になりえるんだな、とかバカみたいなことをしみじみと僕は思つていた。

彼女の凶器に、おれ狂氣、なんつって。

そんなくだらないギャグを思いついて一人で「さむいなあ」と肩をすくめていた。もちろん、視線は彼女のおっぱいに固定したまま。朝からいいもの持ませてもらつたなあ。そろそろ行くか。

そう思いつつも、視線は彼女のおっぱいに釘付けのまま歩き出そうとした瞬間　バチリ。

彼女と、目があつてしまつた。音がした気がするぐらいしつかりと。

「…………」

ああ、これはやばいな。と思つた。

このままじゃ、僕はきっと彼女に話しかけられる。話しかけられても英会話なんて出来やしない。学校の授業で英語をやつてるとい

つても、あんなものの実際の会話ではまったく役に立たないことがらしい、十分に知っている。

空欄補充や記号選択なら出来ても、英作文や英会話は出来ないのが日本の高校生の実情……少なくとも僕はそうであることは間違いない。

うん、逃げよう。

別に外国人の美少女に話しかけられるぐらいいいじゃないか、と思うかもしれないけど、僕はよろしくなかつた。

だつて怖いじゃん。なんか。

よくわからないけどさ、英語とか、そういうのもあって他の知らない言葉で話されるのってなんだか怖い。

それが未知のモノへの本能的恐怖と呼ばれるものなのか、つたない英語で話して恥をかくことへの恐れなのか、いい加減なことを言って相手を困らせるかもしれないといったことへの不安なのか。あるいはぜんぜん違うほかの何かなのか、それともその全てなのか。それはわからないけど、とにかくそういういた種類のものを僕は感じていた。

だいたい、へたれの僕は日本人に道を聞かれたって逃げる。いわんや外国人をや、だ。

よし、逃げよう。

一步を踏み出して去ろうとした瞬間、

「…………う」

僕は動くことが出来なかつた。

僕が立ち去るうとしたとき、彼女はすでにこちらに向かつて歩いてきていて。やつと立ち止まつた人だから、彼女は小走りの前傾姿勢で急いでこちらに来つて。それがいけなかつた。

揺れるのだ。おっぱいが。

僕が立ち止まる原因となつた凶器が、彼女が歩くたびに揺れた。前傾姿勢の小走りで歩くために、ブラックホールはうにやうにやと形や大きさを変え、その奥にある、世界の真理を僕に見せようと

する。

僕は目を離せなかつた。彼女のブラックホールの先には人類待望の世界の真理がある。それを手にすれば、この世界に満ちた数限りない詫いはきっとなくなるのだと思った。そうに違いないと確信した。ああ、それなのにどうして目を離すことが出来ようか。僕が見れば、世界は平和になるんだ。

世界平和はおっぱいの奥にある。

僕は見つめた、世界のために。一步一步、歩くたびに形を変えるブラックホールを。飲み込まれそうになる自我を必死に保ち、その奥底の真理を覗き込もうと、目をぐわっと見開いて血走った眼で焦がすほどの熱意を込めて、僕は見つめた。

ブラックホールは徐々に、だが確実に大きさを増し、僕のもとへと近づいてくる。世界の真理も僕へと近づいてくる。しかし、ブラックホールの闇は想像以上に暗く深く、世界の光全てを奪い、真理をその中に飲み込み、誰にも見ることが出来ないようにしている。近づけば近づくほど、僕は真理が遠ざかっていくような錯覚に襲われた。

だが、あきらめない。僕は、あきらめない。

世界のために！ みんなのために！ 僕は、なんとしても見る！

ついにブラックホールが僕の眼前へと迫つた。ブルン、と大きくたわんだ瞬間、その奥の真理にまで光が差し込み、

見え

「Excuse me?」

その瞬間、見えそうだった真理は搔き消えた。ブラックホールという幻想もどこかへ消し飛んだ。

彼女が、僕に話しかけてきたのだ。おっぱいに目を奪われて、僕は逃げる機会を失つた……馬鹿だと思う。自分でもさつきまでの頭の悪い思考が自分のモノだと思うとやりきれない思いだ。

「……Excuse me?」

不安そうな顔で彼女は僕のことを見上げた。いわゆる上目遣い。ドキッと胸がはねた。外国人特有の近い距離感。

「あ、ああ。はい、はいはい。イエスイエス。オーケー オーケー」  
金髪美少女の上目遣いなんて非常事態にドキッとしながら、日本人離れしたすっと通った鼻梁や長いまつげに、うわー日本人じゃねえ、と当たり前を感じ、あせった僕はとりあえず顔を縦に振つてイエス、オーケーと答えていた。

おっぱいを見ていたことへの罪悪感とか、距離が近くておっぱいがぶつかりそうで、それにちょっと期待をしてしまっている部分もないとはいえないけど、決してそれだけでもなくて、困っているひとに話しかけて無視するというのができない典型的な日本人である僕。

「Oh, Thank you! I want to go to  
this picture's place. Do you  
know there?」

そんな僕に彼女は、そう言いながら、一枚の写真を見せた。そこにはどこかの神社の境内と大きな桜の木、その横に立つ白髪の日本人性と彼に抱きつく金髪の少女が写っていた。満開の桜が散る中で撮られた、懐かしい感じのする色あせた写真。

僕には彼女がなんて言つたのか、聞き取ることは出来なかつた。おっぱいに気をとられていたからじゃなくて、単純に英語力がないからだ。聞き取れたのは「センキュー、ディスプレイス」ぐらい。でもまあ、なんとなくわかる。彼女は身振り手振りを交えてくれているし。

「Do, you, speak, English?」

僕の様子から、たぶん聞き取れていないことがわかつたんだろう。彼女はゆっくりとそう言つた。うん、これぐらいなら聞き取れるしわかる。「英語が出来ますか?」ってことだろ?。たぶん。

「A little」

少しだけ 親指と人差し指で小さな隙間を作つて見せながらそう言った。

「OK」

彼女はそう言って笑ってくれた。ちゃんと云わったみたいだ。僕の英語力もなかなかじゃないか。そんな風に悦に浸る僕に、彼女はゆっくりと話した。

「Do , you , know , there?」

写真を指差しながらそう言った。

わかるよ。ちゃんとわかる。彼女はこの[写真の場所を知っているか、と聞いているのだ。うん、よくわかった。僕はうんうん、と大きくうなずいた。英語なんてたいしたことないじゃないか！ フハハハハ！」

「Oh ! Really ! ? Wow !」

むぎゅ。

「え？」

突然、彼女が僕におっぱいを押し付けた。いや、違う。正しくは彼女が僕に突然抱きついてきたのだ。

「わ、わ、わつ！」

事態を知った僕は変な声を上げた。彼女のおっぱいが僕の胸からみぞおちにかけてもにゅもにゅとぶつかってきて、そのやわらかさで、わけがわからなくなる。

「How lucky！」

そう叫ぶと、彼女は抱きついていた身体を離して、僕の手を両手で包み込んで胸元に引き寄せた。

「うあ！？」

彼女の手のひら越しにやわらかいおっぱいの感触がわかるようなわからないような、いやこれは彼女の手のひらのやわらかさかなやっぱり。混乱する僕に彼女は目を輝かせて、興奮していった。

「Please , Please take me there !」

突然手を握られたことに驚いたり、早口だつたりで聞き取れやし

なかつたけど、「さわってください」つていわれた気がする。

早鐘を打つ鼓動を押さえつけ、もんでいいのかな？ 言つたよね

? きっと……と早とちりしそうな気持ちを押さえ込んで、落ち着

いて考えた。

どうして彼女は突然、こんなことを？ まさか一瞬で俺に惚れた  
？ なんてことはありえない。落ち着いて考える。今会話を  
思い出せ。

彼女が「この場所知ってる？」「と言つたのが僕には理解できた。  
だからうなずいた。

.....。

アレだ。これは不幸な行き違いというやつじゃないかな？ うん。  
彼女は僕がうなずいたのを、場所を知つている、という風に受け  
取つたのだろう。それで、場所を知つてている僕に、連れて行つてく  
ださいと、たぶんそんなとこ。

これは……まずい。彼女は田をきらきら光らせつまるでヒーロー  
に恋するヒロインみたいな瞳で僕を見つめているけど……僕はその  
場所を知らない。

[写真に懐かしい感覚を抱いたと言つても、よくある日本の春の風  
景、みたいなもので、はつきりどこと知つてているわけじゃない。  
大半の日本人が抱くであろう感想だ。]

もちろん、この駅前で聞いて回つていいのだから、この辺なん  
だろう。だから、見たことや行ったことがある気もする。でも、気  
がするだけで本当はないかもしれない。そのぐらいあやふやな感覚  
だ。

一体これをなんて説明したらいいんだ？ こんなに微妙な気持ち、  
日本語以外で説明なんか出来ない。日本語ですら、確實に相手に伝  
える自信はないのに。

「ああ、ええと……アイハフトウーゴートウースクール……」

どうしようもなく僕は、苦し紛れにそう言つた。これから学校  
に行かなきやならないんだ、と。腕時計を指して、ノータイム、と

かソーリーとか。もう文法も何もない、苦し紛れの単語の羅列。ひどいわけだ。

僕がそう言つた瞬間、彼女はすぐ落ち込んだ。目に見えてはつきりとわかるぐらい表情が暗くなつた。

「... ah , umm , Could you tell me where the place is?」

すぐるような目で彼女は僕を見た。場所だけでも教えてくれませんか、とかきつとそういうことを言つたんだと思う。でも、僕には答えられない。

「... AIM SO-LEE , AIKYANT」

「... Ok . Sorry . Thank you」

彼女は僕の言葉に落胆した。気丈にも微笑みながらセンキューと言つてくれたが、今にも泣き出しそうだつた。

「... SO-LEE」

それ以上彼女を見ていることは出来なかつたので、僕は背中を向けて歩き出した。

一瞬だけ、彼女が僕を呼び止めようとしたのが気配でわかつたけど、立ち止まらずに歩き続けた。

僕はそのまま学校行きのバスに乗り込んだ。

時間がないと言つたのはうそではない。学校行きのバスが出るまであと数分しかなかつた。それは本當だ。このバスを逃したら遅刻だつた。そうだ、仕方が無かつたんだ。

バスのドアが閉まり、アナウンスが発車を告げる。窓からロータリーを見ると、彼女がベンチに座つてうつむいているのが見えた。

... 仕方が無い。僕は悪くない。どうしようもなかつた。

僕が自分にそう言い聞かせる中、バスは発車した。

満員のバスの中、僕は彼女のことを考えていた。仕方が無かつた、と言いつつ、そう思わない自分がいた。

……彼女はなんであの写真の場所を探しているんだろう。言葉も通じない土地で。通訳もなしに。言葉の通じない外国にまでくるんだから、きっとよっぽどの事情があつたのだろう。

……言葉が通じないことへの不安とか、外国人は感じないのかな?

日本人は間違えることを怖がるけど、外国人は怖がらないとテレビや本で何度か聞いたことがある。なら、言葉が通じなくても不安に思つたりはしないのかな? 外国人つてなんかみんなポジティブっぽいし。

外国人だから不安は感じない そんなわけがないのはわかつていた。

言葉も通じない見ず知らずの土地で、写真の場所を探す。一生懸命声を上げても、誰も立ち止まってくれない。みんなが自分を避けていく。

不安になるぞ、泣きたくなるぞ、見ていたもの。ベンチに座っていた彼女の肩が震えていたことだつて、見えていた。そう、見えていたんだ。

彼女は僕なんかとは比べ物にならないぐらい怖かっただろう。不安だつたろう。

だから、僕が立ち止まつたときに駆け足だつたのだ。僕がうなずいたときに抱きついて喜んだのだ。胸がぶつかることも気にしないで抱きついて、手を握つたのだ。

そのときの彼女の顔がよみがえる。

思わずドキッとして、抱きしめたくなるぐらーいのとびきりの笑顔だつた。

「しようがない、学校あるし」

そう自分に言い聞かせる。

日本人は、理由がないと動けない、ということを聞いたことがある。例えば、道で困っている人がいたとき「助けてあげたいな」とはたいてい的人が思うのだけど、きっかけがなくてそのまま素通りしてしまうというのだ。でも反対に、忙しいときでも「助けてくだ

さい」と言われば、手を貸さずにはいられない。それが日本人。

僕は、そんな典型的な日本人だつた。理由がなければ動けない。

けど、理由があれば、動ける

だから「学校」という理由があるから僕はあの場を去ったのだ。  
そして、彼女を助ける理由はなくなつたのだ。

ズキン、  
と胸が痛んだ。

僕はもしかしたら病気なのかも知れないと唐突に思つた。

そうだ。僕は……おっぱい病なのだ。この病気はすばらしいおっぱいから遠ざかると、胸が痛くなつてとても耐えられなくなると、いう危険な病だ。

き金になつたのだ。

すいません！ 降ります！」

バスの降車ボタンを押して、僕は叫んだ。

「はあはあはあ」

僕が駅前へと戻ったとき、彼女はまださつきのベンチに座つてうつむいたままだった。

ない。

彼女の落ち込みようは近くで見ると「そう強くて、その原因になつた張本人がどの面下げて戻れるのだ、という雰囲気だった。

時間稼ぎと、走った渴きを癒すため、とりあえず、自販機でスポーツドリンクを買い、それを飲みながら、彼女の様子をうかがう。ラッシュを過ぎて閑散とした駅前で、ベンチの端に腰掛けてうつ

むく彼女の姿はいつそう悲しげに見えた。だけど、そんな状態でも、時折通りかかる人々は見て見ぬ振りをして通り過ぎていく。……

誰か、声ぐらいかけてやれよ。女の子が困ってるんだぜ？

自分のことを棚にあげてそう思つてゐる僕自身に気がついたとき、気持ちは決まった。

彼女の座るベンチへと近づく。

僕が近づいても彼女はうつむいたままピクリとも動かない。いきなり声をかける勇気はないで、同じベンチの反対側の端に腰を下ろした。

飲みかけのスポーツドリンクをチビチビと飲む。いくら飲んでものどはカラカラだった。

彼女のことを見目でうかがう。

「…………」

彼女は目を閉じて、涙をじっとこらえているよう見えた。身体が時折小さく震える。その横顔はとても悲しげで

「…………」

スースー、といつ規則正しい彼女の息遣いが聞こえてくる。

「…………」

彼女の横顔を見つめて、僕は、はあ、と息をついた。

「…………寝てるよ、この子。」

彼女はスースーと規則正しい寝息を立てて、二くじ二くじと船をこぎつつ、うたた寝をしているようだった。

彼女の呼吸にあわせて、豊かなおっぱいが上下する。

こんなところでなんて無用心な子だろう。肩も丸出しのタンクトップでおへそまで見えているといつのこと。触られたらどうするつもりだろう？

彼女の上下するおっぱいを見つめて、僕は無意識に「クリ」と生睡を飲んだ。いや、いや、いや。違う、違う。よ。

とにかく早く起こしたほうがいい。こんな無防備な姿をいつまでも見せられたら僕の精神が病んでしまう。

それに、もう春で今日は暖かいとはいって、こんな格好でいつまでも寝ていたら風邪を引く。……風邪を引く、って英語でなんて言つたつけ？

「おーい。ブリーズ、ウェイクアップ……？」

起きてくれ、と言つたつもりなんだけど、彼女は少しも起きてはくれなかつた。……風邪、風邪……ウインド？ は違うよな。

「起きて、風邪引くよ」

もう一度、今度は少し大きな声で声をかける。めんべくさくなつた僕は日本語でいいことにした。

彼女はぐずるようイヤイヤをして、少しだけ肩を動かしたけど、起きる気配はなかつた。

「…………」

人が親切で起こしてあげようとするのに嫌がるなんて。……彼女は少しのことでは起きなかつてない。ちょっと驚かすぐらいじゃないと起きないだろ？

僕は彼女の大きくて豊かなおっぱいを見つめ、ゴクンと生睡を飲み込んだ。心なしかさつきより唾液の量が多い気がする。

うん、起こしてあげよう。紳士的に。

いや、これは仕方ないんだよ。アレだよ、ちょっとしたお茶目だよ？ 決して犯罪になるようなアレじゃないよ。人の親切を嫌がる子へのちょっとした戒めとかだよ。軽いジョークだよ。いや、起こそするために仕方が無いんだよ。起こすための……うん。まあなんかそんな感じのアレです。

僕は恐る恐る彼女へと手を伸ばす。ゆっくりと、ゆっくりと。

そして ふにっ。

「 × ！？」

彼女は何か「キャ」みたいな悲鳴を上げ、ビクンと跳ね起きた。

彼女は何事が起きたのか、とばかりに田を見開いて、そして田の前に立つ僕を見つけると、

「W h y! ?」

たぶん、驚きの声だと思つ。「なんで」とか「うそ、信じられない」みたいな。彼女はそういう目で僕を見ていた。

「グッドモーニング」

呆然とする彼女に、そう言った。

「…………」

彼女はまだ少し寝ぼけているのか、ほんやりとして答えてくれない。口元によだれがたれている。僕はもう一度、さつきと同じじみつに手を伸ばした。

ふにっと、触れさせる。彼女のやわらかなほほに、手に持つ

たスポーツドリンクを。

「H y a ! ?

彼女はまたも悲鳴を上げた。たぶん「冷たい！」とかそんな意味だと思うけど、聞き取れない。彼女は冷たいのを嫌がるよう、僕の手からスポーツドリンクを奪い取った。

……誰だ、僕が彼女のおっぱいを触ったと思ったのは、そんなことしないぞ。清く正しい日本男児として、寝込みの無防備なところを襲うなんて卑怯なまねは絶対にしない。あくまで愛てるだけなのだ。それがポリシー。

「……W h y ? W h y a r e y o u h e r e ? Y o u  
w e n t t o s c h o o l ……」

なんて言つてゐるのかわからないけど、多分、どうしてここにいるのか、と聞いているんだろう。スポーツドリンクを手に持つた状態のまま、彼女は信じられないものを見つめているような顔をしていた。そんなことを聞かれても説明に困る。そんな難しいこと英語では言えない。いや、仮に言えたとしても恥ずかしくて言えやしない。

おっぱい病なんです、なんて、一体どうやって言つんだ？

「んー、何だ。そのピクチャープレイス、……探す、ってええと……ルックフォーウィズユー」

身振り手振りを最大限に活かして、「一緒にその場所を探すよ」と、なんとか伝えようとする。

「A h - w o u l d y o u h e l p m e ?」

「イエス、イエス」

手伝ってくれるの？ 僕の言いたいことが伝わったみたいで、彼女はそう聞き返してきた。それにブンブン首を縦に振つてうなづく。彼女は小さく、信じられない、まさか、といつよつなことをつぶやいて、小さく首を横にふつた。

「アイ、ヘルプ、コー」

ぐいっと親指を立てて笑つて見せた。ウインクも決めて、歯がキラッと効果音を立ててきらめきくようなイメージの笑顔を。彼女は感極まつたように「A a - a h……」とつぶやいて。ぐいり、むきゅ。チヨッ。

「T h a n k y o u ! t h a n k y o u ! t h a n k y  
o u v e r y m u c h !」

僕に抱きつくと、ほほにキスをした。

とても強く抱きしめられておっぱいがむにゅむにゅとつぶれていだ。しかし、残念なことに僕はそのときの感触をまったく覚えていない。

ほっぺたにされたキスの感触で、頭が朦朧としていた。唇のやわらかさとおっぱいのやわらかさのダブルパンチで今にも昇天しそうな僕に、彼女は笑顔で言った

「わたしは、S o f i a • R o w l a n d s です。ソフィって呼んでください」

流暢な日本語で。

「……は？」

日本語ペラペラ……そ、そつか

ソフィと呼んでください、そう言つた彼女は自分がどうして日本語を話せるのかを、教えてくれた。なんでも、彼女はおじいさんが日本人のクワオーターで、日本語はそのおじいさんから教わったそうな。彼女自身は生まれも育ちもアメリカで、日本に来るのは今回が二度目だとか。

そつか、ハ、ハハハ……彼女の隣に座つた僕はそんな乾いた笑いを漏らしていた。

いや、だつてさ、あんなにつたない英語で話しかけてさ……相手は日本語もわかつてたからこそ僕のあんな英語が通じたってことで。あたふたとかつこ悪く、つたない英語を話していた自分がバカみたいだ。最初から日本語で話してくれれば、あんな勘違いも起こらなかつたのに。

「……ごめんなさい」

「へ？」

意味がわかつてないからこそ適当にしゃべれた言葉が実は理解されていてとわかつて恥ずかしく思つ僕に、彼女は頭を下げた。その拍子にタンクトップの胸元がゆるみ　うお、み、見えそうだ……奥の奥まで、見えそうだッ！

「試すような真似をしてしまって……」

彼女が頭を上げるのにあわせて、僕も覗き込もうとして傾きかけた身体を元に戻す。……「ごめんなさいは僕の方です。ごめんなさい。

「最初から日本語だと、変な人に絡まれるって。英語なら、英語が出来るお人よしか、英語も出来ないよっぽどのお人よしか、まれな変態だけしか話しを聞かないからと、日本人の友達が……」

そう言つて彼女はにっこり微笑んだ。……僕はその三つのどれに分類されているのだろう?　……変態、じゃないよ……ね?

「でも、英語だと本当に誰も話しを聞いてくれなくて……だからあなたがいてくれて本当によかつた

えーと、と彼女は少し考えるようにして言った。

「あなたは、すばらしいお人よしです」

につこりと笑つてうれしそうに言つてくれた。……お人よしつて言葉がほめ言葉ではないことはその笑顔に免じて黙つておこり。

うんうん、と渋い顔でうなずいた僕に彼女は聞いた。

「あなたの名前を教えていただけますか？」

「ああ、オレは、今井周一」

シユウイチ、とつぶやいた彼女は、顔をぱつと明るくした。

「シユウ……私のおじいちゃんと同じ名前！」

「おじいさんもシユウイチなんだ？」

「はい、おじいちゃんの名前はシユウゾウでした」

それは日本では同じとは言わないよ……そう思つ僕に、これがそのおじいちゃんです、そう言つて彼女はさつきの写真を取りだし僕に手渡した。この白髪の日本人男性がそうなのだろつ。歳をとつているが、背筋はピンとして、スマートな体型。ジャケットにジーンズ姿のかつこいいおじいちゃんだ。

「かつこいいおじいちゃんだね。こっちはきみ？」

彼に抱きつく金髪の少女を指して僕は聞いた。

「ええ、そうです。小さいころに、おじいちゃんと一緒に日本に来て、そのときに撮つた写真なんです」

彼女はそう言つと、懐かしむように僕の手の上に置かれた写真の自分とおじいさんを指でなぞつた。そのじぐさはとても色っぽく、ドキッとした。

「……この場所を探してるんだよね？」

「ええ」

彼女はそこで僕を見上げて聞いた。

「この場所を、思い出せませんか？ 私は、小さかったので覚えていくなくて」

ああ、そうだった。彼女は僕がこの写真の場所を知つていると思っているのだ。……謝らないとな。彼女に写真を返して僕は、思い切つて言つた。

「……」「めん！ オレ、その場所わからないんだ。さつきうなずいたのは、英語が聞き取れて、意味がわかつてうなずいただけで」

僕の言葉に彼女は、目を大きく開いて、残念そうにしたけど、

「そうですか……私の方こそ、早とちりして」「めんなさい」

そう言つて謝つてくれた。しゅん、と小さくなつた彼女をそのままにして置けなくて、僕は口を開いた。

「きみのおじいちゃんも、覚えてないの？」

もしかしたら、という思いでそう聞いた。

「……おじいちゃんは、先月、亡くなりました」

「え……あ……」「めん」

軽く口にしたこと、後悔した。

少し考えれば、おじいちゃんがすでに亡くなつていることぐらい予想できた。彼女の写真を眺める雰囲気や、語り口からだつてわかつたはずだし、第一、おじいちゃんに聞けるのなら、一番に聞いているに決まつてる。聞いてわからなかつたか、聞けなかつたからこそ、僕なんかに頼つているんだ。

そのどつちにしろ、掘り返されてうれしい類のものでない」とぐらうい簡単に想像はつく。

「いえ。いいんです。気にしないでください」

彼女はうつすらと微笑みながらそう言つた。

「生前、おじいちゃんと約束したんです。それを果たすために、一人で日本まで来たんですけど、肝心のその場所がわからなくて……」「へへ、と力なく笑い、彼女はうつむいた。その目元にはうつすらと涙が浮かんで見える。

すごいな、と素直に思つた。

だつて、アメリカだぜ？ アメリカ。世界で一番広い海、太平洋の向こう側から飛行機で片道七時間ぐらい。チケット代や滞在費を考えたら何十万とかかる。そんなところから、目的地もはつきりわからないのに、死んだおじいちゃんと約束を果たすために、日本に来たんだ。

それは、すごいことだと思つ。

僕には、そんなこと出来ない。約束の場所がわからないのに、それを果たすために、見ず知らずの土地に行つて、現地で写真一枚を手がかりに探すなんて。

外国人ってなんかオーバーだし、ポジティブだし、不安に思つたりしないから、そういうこと出来ちゃうのかなあ……なんて思つたけど。そんなわけない。それは今の彼女を見ていればわかる。。

不安に押しつぶされそうで、怖くて泣きたくてたまらない。それを必死にこらえている彼女を見れば。

怖くて当たり前だ。外国人とか、そんなこと関係ないのだ。

知らない場所で目的地を見失つたら誰だつて怖い。いや、知つてる土地ですら迷子になるのは怖いのだ。それを乗り越えて、日本まで来た。彼女はその不安を、太平洋というでつかい境ごと乗り越えてやつてきたのだ。

どうにかしてあげたい そう思つちゃうだろ。

外国人つてだけで不安になつて逃げ腰になつた僕には、多分、彼女みたいに行動することは出来ない。それでも、だからこそ、そんな行動が出来る彼女の手助けをしてあげたいのだ。

「よし、探そう！」

僕はベンチから立ち上がると、彼女に向かつてそう呼びかけた。

「え？ でも……」

「大丈夫！ オレ、この辺には詳しいし。神社にも詳しいし！ 桜も好きだから！」

この辺に詳しいのと桜が好きなのは本当だけど、神社に詳しいといつのは真つ赤なうそだ。とにかく彼女を励ましたくて思いつぐまに言葉を並べる。

「それに、きみだつて、いろいろ回ればその場所のこと思い出すかもしれないし。大丈夫だよ」

「ね、と笑いかける。

「一緒に探そう」

僕は彼女に手を差し出した。彼女は驚いたように目を丸くして、「は、はい！」

ぎゅっと僕の手をつかんで立ち上ると、にっこりと笑った。

じつして僕たちの、思い出の場所探しが始まった。

### 3

「うーん……写真以外の手がかりは何もないんだよね？ 地名とか

探そう、と意気込んだはいいものの、写真以外の手がかりがない僕らは、結局まだベンチに座つたままだつた。

「……はい」

彼女は申し訳なさそうにうなずいた。

「手がかりはこの写真だけしかなくて……」

僕は彼女からもう一度さつきの写真を見せてもらつた。あらためてじっくりと見て見るが、そこに写っているのは神社の境内と大きな桜の木。それからおじいちゃんと小さいソフィイ。

この写真を最初に見たとき懐かしい気がしたから、あらためてじっくり見れば知つてる場所なんじゃないかと思つたけど……わからなかつた。

神社の名前が書いてないかと見てみると、残念なことに書いてない。桜の向こうには青空が見えるから、ここが他よりも高い場所だということはわかるけど……神社って結構、他よりも一段高い場所にあつたりするからなあ。

結局、手がかりになりそうなのは、神社と大きな桜の木。その二つだけ。

とりあえず、このまま座つても仕方ない。

近くのそれっぽい神社をまわつてみよう。そうしている間に、そ

の場所を思い出すかもしれないし

よつとベンチから立ち上がった僕は、彼女に写真を返してそう言った。

「は、はい

「あ、そのまでいいよ」

立ち上がろうとした彼女を制する。

「徒歩でまわるのは大変だし、自転車もつてくるから待ってよ」  
そう言って、さつきとめたばかりの自転車を駐輪場から持ってきた。

「一人乗りつてしまことがある?」

僕の質問に彼女は首を横に振った。

「で、でも。知つてはいます」

ローマの休日とか……あこがれました。目を輝かせて彼女はうれしそうに笑つた。

「そつか、それじゃあ、どうぞ」

僕は自転車にまたがつて荷台をポンポンと叩いた。……生憎、ベスペジャなくて、ただの自転車だけ。そう笑いながら。

「し、失礼します」

彼女は恐る恐る、自転車の荷台に女の子座りで腰かけた。不慣れでびくびくと震えているのが、とても初々しい。

そんな風に澄ましたように見せかけて、内心僕はドキドキだつた。……彼女が二人乗り初めてだつて言つたけど、僕だって初めてなんだ。女の子と二人乗りなんて。

「よ、よし。行くよ

「はい」

僕が声をかけると、彼女はぎゅっと僕の腰に手をまわした。軽く添えるようなその手がわき腹の敏感な部分にちょいと当たつて、僕はもうたまらんかった。

それでも、ぐいっと力を入れてペダルを漕ぎ出した。

とりあえず、近くの神社を目指すために。

「このときのサイクリングは、人生で一番幸せな時間だった。一人乗りをしているのに、ペダルはいつもよりも軽くてどこまでも漕げる気がした。きっと僕の自転車も金髪美少女を乗せることが出来て喜んでいるんだろう。

それにしても、自転車を漕いでいるだけで、まさかこんなに幸せを感じることが出来るとは……彼女を後ろに乗せて走りながら僕は心底そう思つた。

世にいるたくさんのカップルが一人乗りをするわけを今日はじめてしつかりと理解したよ。

カタン

「キヤ」

ぎゅっ。むぎゅっ。ふにふに。

小さな段差を乗り越え、車体が軽く揺れ、彼女が僕に強く抱きついた。

彼女は初めての一人乗りを怖がって、僕の腰にしつかりと腕をまわしてしがみついてきた。そして、今みたいに小さな衝撃のたびに悲鳴を上げ、ぎゅっと抱きついてくるのだ。

ここまで言えばわかるだろ？

そのたびに、彼女の豊満なおっぱいが僕の背中に押し付けられて。押しつぶされたおっぱいがもにゅもにゅと形を変えて僕の背中をマッサージ。さらに必死に僕にしがみつく彼女は、息をちょっと荒くしていて、ハアハアしていく……すんげえ、えろい。

世のカップルは、これを堪能するために一人乗りしてるんだな、と僕はしみじみと思つた。

ガタン

「んつ」

ぎゅうっ。もにゅう。むにゅむにゅ。

たまにあえぎ声まで混ざるからもうたまらん！ 僕はいつでも昇

天できる。イエス、おっぱい！ カタン、カタン、カタン。

「キヤ、アンシ、ああん、ダメッ」

むぎゅう、ぎゅうぎゅう。むにやもにゅ。

僕はそんな彼女の声を背に、一心不乱にペダルを漕ぐ。

「あ、あのつ……んつ……もつと……ゅつくり……つ」

「ああ……じめんじめん」

「んつ……じわい……、もっと、つ……やせしく……くつか……して」

ああ。彼女の表情を見れないのがとても残念です。つていうか、もしかして意識してセリフを選んだりしてないよね彼女？

実は僕はさつきからわざとでこぼこ道を選んで走っていたんだが（ホント、じめんなさい）。それもそろそろおしまいにした方がよさそうだ。

……なぜつって？ それは……ほら……アレだ。彼女が怖がつてゐるから。うん。そう。おっぱいの感触がなんだかだんだん申し訳ないし。身体が火照つてもうどうしようもないし。……僕が本当に昇天しかねないからじゃないよ。決して。火照つてるのは自転車漕いでるからだからね？ ……ふう。

最寄の神社に到着した。この神社はこの辺では一番大きく、桜がきれいなことで有名で、今の時期、休日はお花見客でにぎわっている。幸い今日は平日なので、そんなに人はいない。

ここは僕も毎年初詣に来るからよく知つていて、写真の場所がここではないことはわかつていたけど、神社と言われてすぐに思いついたのはここしかなかつたのだ。

彼女が思い出すきっかけにでもなればいいと思つてきたけど、神社の関係者に聞けば、写真の神社を知つてゐるかもしない。

適当なところに自転車をとめて、鳥居をくぐり境内へと入ろうとしたとき、不意に彼女が立ち止まつた。ボケーっと空を見上げてい

る。

「どうしたの？」

「これは何ですか？」

「彼女は鳥居を見つめて言った。

「それは鳥居つていつ……神社の門かな？」

「トライ……」

彼女はそうつぶやくと、田を細めて鳥居を見つめた。

「……何か思い出した？」

「いいえ、と彼女は首を横に振った。

「日本に来たんだな、って」

そう言つて照れたように笑つた。

「いまさらなんですけど……私、日本に来たんだって思つて」

彼女はそうつぶやくと、神社の境内を興味深そうにゆっくりと見回した。

そんな彼女を見ていたら、不意に涙がこみ上げてきた。

彼女は今まで、そうとう緊張していたんだろう。日本に来た、といふことを感じる余裕もないくらいに。彼女があまりにも自然な日本語で話すから忘れそうになるが、彼女が日本を訪れるのは二度目なのだ。それも、前のことはほとんど覚えてないから、初めてのようなものだらう。

……それなのに、今まで、日本に来たことを実感してなかつたつて。

こみ上げてくる涙をこらえながら、僕はひとつのこと決意した。

なんとしても、写真の場所を見つけよう。そしてそれだけじゃなくて、日本を楽しんでもらおう。僕はそう決意した。

「どうしたんですか？」

突然涙ぐんだ僕に彼女は心配そうに聞いてきた。

「なんでもない、なんでもないよ……中へ行こうか」

涙をぬぐつた僕は彼女をうながして、神社の中へと入つていった。

「……不思議な感じですね」

神社の中に入ると彼女はそう言つた。

「なんだか、空気が違つ氣がします……あ！　あれは何ですか？」

そう言つて彼女が指差したものは、狛犬だった。

「あれは、狛犬って言つて……神社の番犬みたいなもの……ですよ  
あつてるよね？　だいたい、あつてる？」

「変な顔ですね。どうして左右で顔が違つんですか？」

「……個性、じゃないかな」

「そりなんですか」

「ごめん、適當なこといいました」

狛犬が左右で顔が違うとか、僕も今、気がついたし。  
彼女は目につくもの一つ一つについて尋ねてきた。

「あれは？」

「あれは、お参りするときに、手とか口をすぐためのものだよ

「オマイリ？」

「ええと……神社とかお寺で、神様を拝むこと、だと思つ」

「……ふーん？」

彼女はわかったような、わからないようなうなずき方をした。：

…さつきから僕は何もまともに説明出来てない。

彼女に日本を楽しんでもらおつゝと決意したくせに、僕は日本のことについてちゃんと知らなかつた。聞かれても答えられないことばかりだ。

そんな知識なんて普段使うことないからいいじゃん、と今まで思つていたけど、今は、なんだか無性に恥ずかしく、彼女にうまく説明できないことが悔しかつた。……これからは、日本文化についてちゃんと勉強しよう。そう強く思った。

この神社は当然、写真の場所ではなかつた。境内の掃除をしていた人に聞いて見たが、知つてゐる人はいなかつた。彼女も何かを思い出した様子はなく、仕方なく次の神社へ行こうと思つたとき、彼女

が僕に声をかけた。

「あの……オマイリつて私にも出来ますか？」

「ん？ うん。誰でも出来るよ。せっかく来たんだし、お参りして  
「うか」

ついでだし、と何気なく僕はそう提案したのだが、  
「はい！」

彼女はとてもうれしそうに、おっぱいがたわむぐらに、うれしそうに大きくなづいた。……そつか、日本人にとつては別に楽しむようなことじやなくとも、彼女にとつては違うんだ。そんな当たり前のことを僕は思い知った。

手水舎（チヨウズヤと言いつのだと境内にいた人に教えてもらつた）で、手と口をすすぐ。彼女が口をすすぐときに、手からこぼれた水が、おっぱいの谷間へとこぼれた。ヒヤン、と彼女は声を上げて、それを拭つたのだが、そのときのたまみかたが、もう！ 僕は鼻から暖かいものが垂れるのを感じた。

そんなやりとりをはさみつつ、社殿（これも教えてもらつた）へと行き、賽銭箱へと五円を投げ入れた。

「それは？」

「お賽銭、つていって……なんだろ。神様に願いをかなえてください、つてお願いして、そのお願いの気持ちとか感謝の気持ちとか、それをあらわすもの、かな」

「日本の神様は、お金を払うと願いをかなえてくれるんですか？」

「うーん……そういうわけじゃないけど

でも、そう思つてしまふ気持ちもわからなくなはない。

「……日本人は、叶つたらいいな、つて思つてるけど、本当に神様が願い事を叶えてくれるとは思つてないんだ、きっと。でも、少しだけ期待してるから……とか。うーん。なんだろ。神様に話しきを聞いてもらうための対価、とか……でも、そんなに深く考えてない気がする」

結局のところ、今の日本人はさほど神仏を信じてはいないのだ。

気休めとか、儀礼とかそのためのお参りだから、お賽銭にも、特別思い入れがあるわけじゃない。その微妙なさじ加減が、伝わるだろうか？

「たくさんお金あげた人が、叶えてもらえたというわけではないんですね」

「うん。たくさんしたほうが、叶いそうな気はするけど、一緒だね」「なぜ、五円を入れたのですか？」

「御縁がありますように、つて……字は違うけど、漢字が同じだから。まあ、なんていうか、いいことが、ありますよ！」

「そうなんですか。じゃあ、私も」

お賽銭を投げ込み、鈴をジャラジャラと鳴らした。鈴の意味も聞かれたけど、そつちはさっぱりわからなかつた。きっと家のチャイムのようなものだよ、と答えてく。

一回礼をして、二回手を打つ。

神様、どうかこの子にあの写真の場所、教えてやつてくれださい。お願ひします！ どうか、おじいちゃんとの約束が果たせますように！

手を合わせて僕はそう祈つた。最後にもう一度礼をして頭を上げると、隣では彼女も僕のまねをして、同じようにお参りをしていた。金髪の外国人が、お賽銭を投げてお参りをしている光景というのは、横で見ていると不思議な気分だった。……日本の神様って外国人の願いでも聞いてくれるのかな？ 唐突にそう思った。いや、四分の一は日本人の血なのだから聞いてくれるだろ。きっと。

「行こうか」

お参りを終えた彼女にそう言つて、歩き出した僕は、ふと、真っ白でふわふわとした、あるものを目にした。おっぱいじゃない。おみくじだ。一本の木にたくさんのおみくじが結ばれていた。

「運試し、していかない？」

「はい？」

不思議そうに木を眺めていた彼女は僕の言葉に首をかしげた。

「あれ、おみくじって言つて、占いみたいなものなんだ。今日のこのからを占つてみようよ」

そう言つて彼女と、おみくじ売り場へと行き、係りのおじさんに言つておみくじを引かせてもらつ。ここのおみくじは、八角形の筒を振つて、出てきた棒に書いてある番号のものを受け取る、という方式のちょっと雰囲気のあるやつだ。

僕が十七番、彼女は二十一番だつた。

結果は。

「小吉……か

微妙なものを引いてしまつた。……探し物、いざれ見つかる。辛抱強く耐えよ。待ち人、にわかには来ぬ、気長に待て。……全体的にしばらく耐えなさいってことか。

「どうだつた?」

「ええと、漢字が読めなくて」

どれどれ、と彼女のおみくじを覗き込むと……末吉。これもまた微妙な。……探し物、すぐには見つからない。地道に探せ。待ち人、すでに現れている。計画的に自ら動け。じきに叶う。……計画的にしなさい、ということが全体的に書いてあつた。にしても、恋愛で計画的について……探し物も、すぐには見つからない、か。

末吉に小吉つて、幸先悪いなあ。

「どうですか?」

そう尋ねる彼女に、全部をそのまま読んだ。本当は適当によひそとうな方向に改变しようとも思ったのだが、全部の漢字がわからないというわけでもないみたいなので、下手に変えるよりもそのままの方がいいと思った。……伝える内容変えても、おみくじの内容は変わらないしね。

「…………どうですか…………計画的に…………」

それを聞いた彼女も、ちょっと困ったように笑つた。

「まあ、あくまで占いだからね。当たるも八卦、当たらぬも八卦、つてね。どうする、これ。結んでくれ?」

木を指して聞く。

「結ぶと、悪い結果はよくなる、って言われたりもするんだけど  
「……結ばなくともかまわないんですか？」

「うん。どっちでも、同じかな。お守りとか記念にもつてる人もた  
くさんいるよ」

じゃあ、と言つて彼女はそのおみくじを丁寧にお財布にしました。  
僕も記念にと、財布にしまつておく。

そのおみくじをしまつたお財布を見つめ、彼女はやわらかく微笑  
んでいた。……結果はいまいちだつたけど、喜んでくれたみたいで  
よかったです。

僕たちは次の神社へ向かうために、その神社をあとにした。

「……」

「……はい

「……」

「……」

写真の場所の手がかりは、一向につかめなかつた。

六つの神社を回つたが、どれもはずれ。最初は、ものめずらしさ  
にテンションの高かつた彼女だけ、神社なんてどこも似たような  
ものだし、手がかりもまったくないしで、徐々に静かになつてしま  
つた。僕の日本を楽しんでもらおうといつ作戦もいまいちだ。

またもはづれだつた、七つ目の神社をあとにしようとして、自転車まで戻る。すでに市内を一周した。一人乗りでこれだけ回つたせいか、  
僕の太ももはパンパンだつた。身体の疲れも結構きている。  
そろそろきついし、次でいったんお昼にしようか、と思いながら  
足をさすりつつ、自転車にまたがる。

「よし、じゃあ次は

彼女に声をかけよとした僕は、彼女が荷台に乗らないことに気づ  
いた。彼女は自転車の隣に立つたままつむいて、写真を見つめて  
いる。

「……どうしたの？」

トイレ? なら、近くにコンビニがあつたけど。そう聞くと彼女

はちょっと恥ずかしそうに違うと首を振った。聞きながらも僕は、そりではないだろうことに気づいていた。

そりや、わかるさ。これだけ回って手がかりがゼロだ。落ち込むとする。

「次ぎまわったら、お皿に」

「……もう、いいです」

僕の声をさえぎって、彼女はそう言った。

「え？ もういいって？」

「もう、探さなくて……いいです」

もういい、という言葉は予想外だった。その瞬間は意味がつかめないほど。

「え？ なんで……」

僕の言葉に、彼女は顔を上げ、力なく笑って答えた。

「写真一枚を頼りに探すなんて、最初から無理だったんですね……それが、わかりました」

その笑顔に、僕は何も言つことが出来なかつた。

「こんなに探しているのに、何も見つからない。何も思い出せない……もう、いいんです」

「そんな……でも」

とつさに口を開いたが、それ以上何かを言つことは出来なかつた。「シコウも、疲れたでしょ？ 迷惑をかけてごめんなさい……だから、もう、いいんです」

これ以上、迷惑をかけられません、と彼女は言った。

「そんなことない」

「いえ……いいえ！」

何をバカな、と思つて口を開いたけど、最後まで言つことが出来なかつた。彼女が僕の言葉をさえぎり、首を横に激しく振ったからだ。

「それに……それに！」

力なく首を振つて言つと彼女は、一度口をつぐみ、

「あなたにはこんなによくしてもらっているのに……迷惑をかけるだけで、なにも思い出せなくて……私は、それが一番いやなんです」

もう一度開いてそう言つと、深々と頭を下げる。

何を言つてるんだ、この子は。

「もう、いいんです。おじいちゃんとの約束は、もういいんです」泣きそうな顔でそんなことを言つのだ。絶対に、よくない顔で。

「いいわけ、ないだろ」

気づいたら口が勝手に動いていた。

「いいわけ、ないじやんかよ！ そんなの！」

気づいたら、大声で怒鳴つていた。

「何でだよ！ 約束のためだけに、わざわざ日本まで来たんだろ！？ 太平洋越えてきたんだろ！？ すげえ不安でも、それ越えてきたんだろ！？ 那を、なんで、なんでこんなところでやめちゃうんだよ！ 絶対によくない！ キミだつて、よくないつて顔してるじゃんかよ！ なのになんで」

「I do not want to be seemed by you a trouble! I seem by you that it is a trouble, and do not want to be disliked me!」

彼女は突然、英語で叫んだ。だから、僕には彼女がなんて言ったのかまったくわからなかつた。

「……私は、シユウに嫌われたくないです」

最初きょとんとした僕は、彼女の言葉に、顔がにやけそうになつた。

彼女が英語でなんて言つたのかはわからない。それでも、最後に言つた日本語だけで十分だつた。

バカ、と言いたかつた。無性に顔がにやけてしまつた。いや、わかつている。彼女がそういうつもりで言つたんじゃないってことはわかっている。彼女はただ「日本で初めて親しくなつた人」である僕に嫌われたくないつてだけだ。わかつてる。でも、それをわかつ

ていても……にやけるのはとめられない。僕に嫌われたくないから、あきらめる、なんて、そんなことをこんなかわいい子に言わせていやけないなんて無理だ。

「それぐらいでいやになつたりしないよ  
だから探そう、と僕はにやけそくな顔を破顔させて、安心させる  
ような笑顔で告げた。

「でも……私、胸、大きいですし……」

「は？」

「に、日本人の友達に聞きました！　日本の男性は、小さい胸と身体の女の子が好きだつて……それに、外国人はカタコトじゃないと許せないって」

尻すぼみで「によ」によとそういう彼女の言葉を僕は半分しか聞いていなかつた。

日本人は小さい胸が好き。大きいのは嫌い　おっぱいが大きいから、僕が彼女を嫌いになる。

その言葉は僕の逆鱗に触れた。触れてしまつた。ふつふつと僕の中のマグマが沸騰していった。

おいおいおいおい、誰だ誰だ、そんなことを言つたやつは。日本人は貧乳好きのロリコンで巨乳は嫌いで15歳以上はババア？  
ふざけるなよ？ふざけるな、ふざけるなッ

「ふざけるなあああ　！」

僕は吼えていた。自転車を蹴飛ばし立ち上がり、獣のような雄たけびを上げた。あまりの怒りで我を忘れていた。

「オレが、大きいおっぱいだから嫌いになる！？　バカにするのもいい加減にしろおおおおお！」

怒りで我を忘れた僕は、大声で叫んだ。

「そんな理由で嫌いになるわけないだろうが！　オレを勝手に決めて付けるんじゃねえ！！　オレは、迷惑だなんて思っちゃいねえよ

！－ これっぽっちも思つちゃいねえ！ カタコトかどうかなんて  
気にしねえ！－

はあ、はあ、はあ、と息を切らしながら僕は、キッと彼女を見据えた。

「オレは、おまえのこと、すげえって思つた。アメリカから写真一枚を手がかりに、日本に来るなんて、そんなことオレには怖くて出来ないよ。それをやつちやうおまえの力になりたいって思つたんだよ！ おまえの願いを叶えてやりたいって思つたんだよ！ わかるか！？だから、オレが、そんなくだらない理由で迷惑に思つたり、嫌つたりするなんてことは絶対にない！ 第一、オレは

大きく息を吸い込んで、僕は吼えた。町じゅうに轟くような音量で。

「オレはあああ、大きいおっぱいがあああ、大イ好キイダアアアアアアアアア－！」

空気がうわんうわんと振動した。神社の御神木がざわざわざわめいた。

言い切つた。思いのたけ全てをドンとぶつけた。全てを吐き出した瞬間、僕の頭はクールダウン。……あ、あああ……やつちやつた。

彼女はそんな僕を、ポカンと見つめていた。そして我に変えると、あわてて両腕で胸元を覆い隠した。……ああ、うあああうああくあＳＷでｒｆｇｔひゅじこｌｐ。

終わつた。これは完全に終わつた。僕がどんな目で彼女のおっぱいをみつめていたのかがばれてしまつた。ああ、終わりだ。アレだな。警察かな。アメリカ人だもんな、裁判起こされるのかな……うああ。

「…………えつち

絶望に打ちひしがれる僕に、彼女はちいさくそう言つた。下をむいたまま、僕は「ごめんなさい」とつぶやいた。

「……今いつたことは、本当ですか？」

じーっと見つめる彼女の視線が僕のハートに突き刺さる。頭を下げたまま僕は答えた。

「……本当にです」

いまさらうそだ、と言つても仕方が無い。何より自分のソウルのシャウトにうそはつけない。

卷之三

視線が痛い。  
無

視線が痛い。無言なのがなあさら痛い。…………あうう  
あれ、少しずつ気持ちよくなつてきたかも？ そう思った瞬間、

「 その痛し視線かふ」と途切れた  
もう

まったく、と彼女はつぶやいた。……僕は新しい用覚めを迎えずに済んだことと、視線が和らいだことにほっとした。

「其一」

頃三一浮六  
用の前二波二

顔を上げると、目の前に彼女のおっぱいがあった。鼻先一寸ぐら  
い。僕の息が吹きかかるほど近く。彼女が大きく息を吸い込んだだ  
けでふれそうな距離。

「おおきいおっぱいが好きなんですか？」  
腕を組んで、胸を挟み込んで持ち上げるようこしながら、彼女は

「 が、 が、 」

僕は荒れ狂いそうな本能を、目を閉じることで必死に押さえ込んだ。答えた。

「さわりたいですか？」

挑発的なその言葉に反応しそうなマイサンを前屈みになつて必死に押さえつける。

「わかりました」

そう言うと彼女は僕から離れた。はああ……知らないうちに止

めてしまっていた息を吐き出す。

「この写真の場所を、探すのを伝つてください。そして、私をそこまで連れて行つてください」

「まさら何を言い出すんだ、と思つた僕に彼女は続けた。

「……もしも、連れて行つてくれたら……そのときは……すきに、してくれても……いいです」

「え……えええ！？」

彼女の突然の申し出に、僕は頭が真っピンク、もとい、真っ赤になつた。

「探すのを、手伝つてくれますか？」

「…………うん で、でも」

「とっせこ、よひこんで！」と言つのをじらふたことを誰か褒めて。

いいかけた僕の言葉を彼女がさえぎる。

「ちゃんと連れて行つてくれたなら、ですからね。それまではえっちな目で見ることも禁止です」

うなずいた僕に彼女は一步だけ近づいて、

「改めて、よろしくお願ひします」

彼女はほほを真つ赤にしながら、僕に手を差し出した。

「よろしく」

声が裏返らないよう、かまないよひに氣をつけながら、僕はその手を握り返し、約束の場所に着くまでは紳士的な目でみつめようと、心に誓つた。

「じゃあ、わっそく行きましょ、はい、これお願ひします」

そう言つと、ソフィイは背負つていたリュックサックを僕に渡した。

「それを背負つしていくください」

「ああ……はい」

僕はソフィイのリュックサックを背負つと、倒れた自転車を起こしてまたがつた。ソフィイは荷台に乗ると、僕の腰に腕をまわした。

「うん、これでもう、おっぱいは当たらないね……うん。」

多少意氣消沈しつつも、なんだかんだで僕はうれしかつた。いや、

正しく胸を揉む権利を得ることが出来たからではなくて。そうじやなくて、なんか、こう　いや、やつぱりやめておこう。なんだか言葉にすると言わってしまう氣がするから。だから　僕は、おっぱいを正しく揉む権利を得たことで、踊りだしそうなほど喜んだ。

「じゃあ、行くよ」

そう言って走り出した。次はどこの神社へ行こうか、そう思いながら桜並木の道を走る。前方の山にも一箇所だけ桜が咲いているのが見えた。後ろには、今までいた神社の桜と、ソフィイ。

左も右も前も後ろも、僕の気持ちも、全部が桜色に染まっていた。

「あっ！」

突然、ソフィイが声を上げた。

「シユ、シユウ……わ、私

「どうしたの？」

トイレ？　と聞いた瞬間、頭をスパンと思い切りはたかれた。

…さつきまでよりも、遠慮がなくなつたみたいで、とてもいいことだと思つ。

「お、思いだしちゃつた……写真の場所」

4

はあ、はあ、はあ。

僕たちは、山を登つていた。

ソフィイの思い出した、約束の場所。それは僕らの前方にある、山の中腹にある神社だった。

ちょうど僕の見た、一箇所だけ桜の咲いていた場所、あれが、その場所だった。

もつとも、ソフィイは山ではなく、リュックを背負つ僕の背中を見て思い出したのだが。……このリュックはもともとおじいさんの物

で、一緒に日本に来たときにおじいさんが背負っていたそうだ。

そして、それを背負う僕の後姿にかつてのおじいさんの姿を重ね、

唐突に思い出したらしい。

ソフィイにそう言われた瞬間、僕も思い出した。

そうだ、この山は前に登つた。……高校入学直後の遠足でこの山の頂上まで登らされたのだ。その途中に、確かに神社があった。そこで僕はお昼ご飯を食べたんだ。

場所のわかつた僕たちは、駅まで戻った。

その山はハイキングするのに有名で、駅から直通のバスが出ているのを僕は知っていた。遠足の時も、そのバスをつかつたからだ。そして、バスに乗り込み、山を登りはじめ一時間

「シユウ、大丈夫？」

後ろを歩くソフィイが僕に声をかけてきた。

「うん、大丈夫。ソフィイは？」

大丈夫、と言いながらも僕の足元はふらついていた。ソフィイのリュックは意外と重く、自転車を漕いでパンパンになつた足に、この登山はけつこうきつかった。

「All right. 大丈夫、もう少しだもの」

そういうソフィイもつらそうだった。だけど僕たちは、足を止めずにひたすら登つた。

そして、

「……ついた」

浅間神社、と書いてあつた鳥居をぐぐる、風に乗せられて桜の花びらが、小さな社殿の向こうからこちらへ舞い踊る。

僕たちは、社殿の裏へとまわった。

そこに、写真の場所があつた。

この神社に一本だけ生えた、大きな桜の木。その向うには、少し赤らみ始めた空。

「ここ……間違いない」

ソフィイは写真を取り出し、カメラを置いたであろう場所に立つて、

そう言つた。彼女の目には、涙がにじんでいた。

「……おじいちゃんとの約束は、果たせそう?」

僕の問いに彼女はこくんとうなずくと、

「シユウ、リュックを貸して」

そう言つた。言われて僕は、背負つていたリュックをソフィイに渡す。ソフィイはリュックを開けると、そこから折りたたみ式のスコップを取り出した。……どうりで重いわけだ。

「それで、どうするの?」

僕が聞くと、ソフィイはまっすぐにこちらを見つめて、言つた。  
「おじいちゃんを、埋めるの」

ソフィイは、スコップで桜の根元を掘り出した。ザク、ザク、ザク。ソフィイが地面を掘るのを、僕は見つめることしか出来なかつた。手を出してはいけない氣がした。ザク、ザク、ザク カツン。

スコップが何か固いものに当たり、金属音が響いた。

ソフィイはそのまわりを、丁寧に堀り、ぶつかつたものを掘り出した。

それは、ブリキの缶だった。何かのお菓子の箱か、そのぐらいの大きさの。それを取り出した彼女は、ゆっくりと地面に置いた。

ソフィイはその缶のふたをゆっくりとあける。ギチギチ、と音が鳴つた。その中から出てきたのは、小さなビンと、小さな箱と、一枚の紙。

ソフィイは、それをひっくり返したふたの上に丁寧に並べると、その紙を開いた。それは、手紙のようだった。彼女はそれをひざの上に広げて読み出した。

「……ツ」

ボタボタ、と紙の上に涙がこぼれた。ソフィイの涙が。ボタボタ、ボタボタ。

「……ツ、んく……ツ……ヒツ」

ソフィイがその手紙をひざの上に置いた、その瞬間、強い風が吹いて、その紙が彼女の手をすり抜けた。

一  
あ  
う

つい、僕は声を上げた。

ソフィイは涙をぬぐいもせず、手紙を拾いにいこうともせず、動かなかつた。あわてて僕は手紙をつかむと、ソフィイに駆け寄つた。

十一

一  
あ

イは、僕は言われてはじめて手紙が風に飛ばされた」とは隻一「いたソフ

「シユウ...シユウ...」

僕は批評したい

あああああん

そのまま、ソフィは大声で泣き出した。わんわん、わんわんと。僕はどうしたらいいのかわからなくて、戸惑っていたが、ゆっくりと彼女の背中に手をまわして、ぎゅっと抱きしめた。

泣き続けるソフィを抱きしめながら、その手紙に目を通す。たけど、その手紙は英語で書かれていて、僕には読むことは出来なかつた。

ソフィイが泣きやむまで僕は、ずっとその背中を抱きしめ続けた。抱きしめたまま動くことが出来なかつた。

「ありがとう……ありがとう、シユウ」

呼ばれて初めて動けた僕は、ゆっくりとソフィイの横にひざをついた。彼女はブリキの缶を手元に寄せて、小さなビンを手にとった。中には何か白い欠片が入っている。

「……それは？」

「……これはね、昔[レリ]ヒテ来たときにおじいちゃんが埋めたもの…」

…おばあちゃんの骨」

そして、ソフィイは話をはじめた。彼女のおじいさんと、おばあさんが出会ったときの話を。

「おじいちゃんとおばあちゃんが出会ったのは、戦争が始まる前だつたんだって。おばあちゃんは、アメリカ商人の娘で、おじいちゃんはそこに商品を運び入れる業者の人だつたんだって。そこで一人はお互いを好きになつたんだけど、身分の差とか、国の差で、人目のつくところでは会えなかつたんだって。それで、一人がよく会つていたのが……[レリ]」

そう言つと、ソフィイは桜の木をやさしく撫でた。

「[レ]の桜の木はね、おばあちゃんのお屋敷にあつたものから分けたんだって。戦争が始まる直前、おばあちゃんがアメリカに帰つてしまつとき[レ]。お互いの無事と、いつかの再会を誓つて。……ううん、逢えなくとも、一人がここにいた証に、つて」

こんなに大きくなつたんだよ、つておじいちゃんが言つてたの。とソフィイは笑つた。

「そのとき、一人はもう会えないと思つていたんだって。でも、戦争が終わつた後、また会つことが出来た。それで、一人は駆け落ち同然で結婚したの」

ソフィイの持つた[レ]真を見る。そこにはおじいさんからは、そんな話とても想像が出来ない。ものす[レ]ベドラマティックなおじいさんだ。

「それでね、おばあちゃんが亡くなつたときに、[レ]に骨を埋めたの。それで、おじいちゃんはそのときに私に、お願いをしてた……自分が死んだら、骨の一部をおばあちゃんと同じところに埋めてくれ、つて」

ソフィイは、リュックからひとつつのビンを取り出した。それにも白く小さな欠片が入つていた……おじいさんの骨だろう。それをソフ

イはおばあさんの骨の横に並べた。

「家族の誰も、そんなこと聞いてなかつたから、私が言い出したときには反対したわ。……おばあちゃんが日本に埋まつてることも知らなかつたし。それでも私はどうしてもその約束を果たしたくて……それで、三日間だけという約束で日本に来たの。お父さんの出張にあわせて」

「今日が二日目だつたから、本当によかつた……ソフィィはうつぶやいた。

「おじいちゃん、急に死んじやつたから、その場所の手がかりも何もなく……遺品を整理してよつやくこの写真と、廿行つた駅の名前だけ見つけたの」

「そうなんだ」と僕はつぶやいた。

「見つからないと思つてた……たつた二日で、何も手がかりがなかつたから……本当に無理だと思つてた」「よかつたね」

「うん。シユウのおかげ。ありがとう。本当にありがとう」ソフィィはまたも泣きながら僕に抱きついてきた。おっぱいとかやわらかさとかなんとかもうわからなくて、僕も涙をこぼした。「一緒に埋めてもらえる?」「うん」

彼女に頼まれて、おじいさんとおばあさんの骨と一緒に埋めた。埋め終わつてから僕はひとつだけ残つた小箱に気づいた。

「これは?」「ああ、これは……」

「そう言つて彼女があけた小箱。その中に入つていたのは、指輪だつた。

「おじいちゃんが、おばあちゃんとプロポーズしたときに渡した指輪だつて。小さいのにおばあちゃんに欲しつて、ダダをこねたんだけど……おじいちゃん覚えてたみたいで、私にくれるつて。二人の形見として持つてくれだつて」

手紙を僕に見せながら彼女はそう言った。

「なんだ？」

その指輪は、シンプルでついてる宝石も大きくないけれど、きっとおじいさんの想いがつまつたものだったんだろう。鎧びた様子もなく、きれいに光っていた。

「そろそろ、帰ろうか」

「……うん」

僕たちは、夕田のきれいに輝く桜の舞い散るその場所をあとにした。

山を降りる間、ソフィイはずっとしゃべっていた。きっと、ようやく全ての緊張から開放されたからだろう。学校のこと、家族のこと、友達のこと……たくさん話した。

今夜アメリカに帰るの？ と聞くと、そう、とソフィイは答えた。時間は平気？ うん、すぐに新幹線に乗れば大丈夫。

バスを待ちながらうとうとするソフィイとそんな話をした。バスに乗つたら寝ちゃつていよいよ、ついたら起こすから。僕がそう言うと、ソフィイは、起きてる。寝ちゃつたら起こして、絶対に。と僕に頼んだ。

そんなことを言つていたけど、ソフィイはバスに乗るとすぐに寝てしまった。疲れがピークに達していたんだろう。

そしてソフィイは今、僕の肩に頭を乗せて眠っている。クークーとかわいい寝息が聞こえる。……バスに乗る前に、寝たら起こしてと言われたけど……この寝顔を見ていると、起こすのが申し訳なく思えた。……それに、出来たらこの状態をもつと味わっていたかった。

おっぱいがぶつかっているわけではないけど、ソフィイの身体のやわらかさ、あたたかさが僕の身体に伝わってくる、時折ゆれる頭のすぐつたさが、僕の脳髄までくすぐる。

……いまさらだけど、ソフィイってすごくかわいい。肩に頭を置かれた今になつてそんなことに気がついた。

ソフィの匂いやあたたかさを感じているうちに、僕もうひとつしてきて ソフィにもたれかかるようになり、僕も眠ってしまった。

## 5

駅につく直前に目を覚ました僕は、まだ寝ているソフィを起こして、ソフィは自分が寝てしまつたことに気づくと、ショックを受け

「どうして起こしてくれなかつたの！？」

と激しく怒つた。そんなに怒られると予想してなかつた僕は戸惑つて、

「『ごめん、オレも寝ちゃつて……』

「ウソ！ 起こしてつて頼んだのに！ シュウのバカ！」

バスを降りるとソフィはトイと僕に背中を向けて歩いていつてしまつた。

「ちょっと、ソフィ待つてよ。『ごめんつてば、ねえソフィ』

追いかけながら僕はソフィに呼びかける。でも、彼女は止まつてくれない。

「待つてば！」

少しいらだつた僕は、彼女に追いつくと、その腕をつかんで強引に振り向かせた。

「何で、そんなに怒つて？」

僕はそこまで言つて、言葉を飲み込んだ。……ソフィの目に涙が浮かんでいたのだ。それが、ぽろぽろとこぼれる。

「え？ あ、ちょっと。なんで泣くの……え、『ごめん、痛かつた？』あわててつかんだ腕を離す。

「バカ……バカバカバカ。シュウのバカ」

涙を流しながらソフィは僕の胸をぽんぽんと叩いた。

「すぐに帰るつていつたのに……なんで起こしてくれなかつたの……」

「え？」

僕がその言葉の意味をとるよつも早く、ソフィイは続けた。  
「もう知らない……シユウなんて知らない……」

そう言つて彼女は僕をよけて駅の改札へと走つて行つてしまつ。僕はどうすればいいのかわからなくて、その場に立ち竦んでソフィイを見つめた。

彼女は改札口でいつたん立ち止まり、

「……バカ」

そつづぶやくと、あとは振り向きもしないで行つてしまつた。  
え、ちょっと、おい……待てよ。本当に行つちゃうの？ ウソだ  
り。おい……。

僕は冗談だらうと思つてその場に立ち止まつていたけれど彼女は本当に行つてしまつて。改札の外からはもう見えなくなつた。

なんだよ、もうー

改札の外からいらのぞいても中は見えなくて、わけがわからなくて腹の立つた僕は、きびすを返して帰るつとして

「ふざけるなこのアマアアア！」

怒鳴り声をあげて、ターン。改札に財布を叩きつけS u i c aで通過。駅のホームを駆け抜ける。

「ソフィイイイイー！」

人が振り返るのもかまわずに僕は叫んだ。そして走つた。新幹線のホームめがけて一気に駆け抜ける。

僕が新幹線のホームへと駆け込んだとき、ちょうど新幹線がホームへと入つてきたところだつた。

おいおい、駅に着いたらすぐ帰らなきや、とは聞いたけど、こんなにすぐなのかよ！ クソ！

「ソフィイ！」

新幹線に乗り込もうとしていた彼女を見つけて叫んだ。その瞬間、

彼女の動きがぴたりと止まった。

「ソフィイ」

荒い息を抑えて彼女に近づく。いいたいことはたくさんあった、けど、何一つとして言葉にならなくて、僕は口をパクパクさせた。

「……バカ」

そんな僕に背を向けたまま彼女は言った。

「シユウのバカ！ バカ、バカ、バカ……もつとすぐに追いかけてよ」

「……ごめん」

うつむいて僕は謝った。

もう、彼女は行つてしまつのに、お別れなのに、何も言葉が出てこなかつた。そう思えば思つほど、出でこなかつた。

「シユウ」

彼女に何か言いたくて、顔を上げたのと、それは同時だつた。

ぎゅつ。チュウウウウ

僕の唇に、やわらかくてあたたかなものが強く押しつけられた。それは僕の唇を挟むようについぱみ、ゆっくりとなぞるように動いて。息がもつギリギリまで、ねつとりと重ねられたそれが、僕の唇からゆっくりと離れた。

「……ありがとう、本当にありがとう。……バイバイ」

発車の合図が鳴り響いて、彼女は新幹線に乗り込んだ。

僕は、ドアが閉まる瞬間まで動くことが出来ず、あ、と気づいたときにはすでにドアは閉まつていて。僕は新幹線のドアに、手を伸ばしたまま固まつた。

そんな僕にソフィイは、くすりと笑いながら手を振つた。

新幹線が去つた後も僕はそこに立ちすくんでいた。

彼女の濃厚なキスの余韻が、いつまでも残つていた。

あれから一ヶ月が過ぎた。

あのあと。ソフィーと出会ったあの日のあと。

僕を待っていたのは、学校をサボつたことに対する、教師と親から  
の雷だった。

でも、それも一日だけのこと。

そのあとに残つたのは、濃厚なキスの余韻だけ。ソフィーとは連絡  
先もなにも交換していなかつたから、お互いに連絡のとりようもない。  
第一、彼女がいるのは海の向こうだ。多分、もう一度と会つことはないのだろう。

ソフィーとの出来事は、僕のとつての大切な思い出の一ページにな  
つて、永遠に僕の中に残る。そう、胸の奥にしまつて、青春の思い出、  
ファーストキスの思い出として。わずか一日の、とても輝いた  
ページとして。

そうなる、と思っていた。

僕はいつものように駅前の駐輪場に自転車を止め、駅のロータリ  
ーへと向かった。

駅前のロータリーに着いた瞬間、僕は足を止めた。  
そこに、謎の少女がいた。

少女というか美少女で、謎の、というか外国人の女の子が。  
あまりにも自己主張が強いおっぱいのために、胸元が強調されて  
いるデザインに見えるタンクトップに、ホットパンツを履いてその  
太ももを惜しげもなく晒した、金髪の美少女が、そこにいた。

美少女は、誰かを捜しているのだろうか、きょろきょろとあたり  
を見回したり、僕と同じ制服を着た生徒を捕まえては話しかけてい  
る。

足を止めたまま、僕は田を丸くして、彼女のことを見つめた。

「な、なんで……」

つぶやいた瞬間、ぱちり、と彼女と田があつた。会ってしまった。

「シユウ！」

駆け寄ってきた金髪美少女が僕の首にぎゅっと腕を回して抱きついた。

「なんで、ソフィイがここにー!?」

僕は驚きの声を上げた。

ま、まさか、僕に会いにわざわざ日本に来たのかー？ そんな、まさか 動搖する僕に、ソフィイは、へへ、と笑つていった。

「私、日本に留学しにきたの。もつと日本のこと、知りたくて」

「そ、そつか」

だよな、そんなうまい話があるわけないよな。あはは、と笑いながらも落胆する僕から、ソフィイは回していた腕を放して、一步下がつた。

そして、顔を赤くして、小さな声でぼそりとつぶやいた。  
「それに……シユウとの約束、まだ果たしてなかつたから顔を真つ赤にして上田遣いで、僕を見るソフィイ。

「約束？ ……あ」

僕は思い出した。

ああ、そういうえば……約束したつけ。もしも、写真の場所をちゃんと見つめられたら、そのときは

「シユウ、あの……」

「は、はい！」

僕はうろたえながら直立不動でビシッと返事をした。

「約束、だから……好きにしていいよ？」

ソフィイは胸の下で腕を組んで、強調するようにソレを持ち上げた。かあつと僕の顔が真つ赤になるのがわかつた。はち切れそうなほど、血液が体内を駆け巡っていた。

「でも……でも……その……責任、とつてね？」

顔を真っ赤にして、いたずらっぽくソフィイは笑つた。

くらくら、とめまいがした。全身が火照つて、熱を帯びてしうがなかつた。

もしかしたら、僕はまた、病気になつてしまつたのかもしない……いや、多分すでにかかつっていたんだ。彼女と出会つたあのときから。彼女と過ごしたほんのわずかの一日の間に、それはもうどうしようもないぐらいかかつてしまつていたんだ。

そう、恋の病、というやつに。

Fin.

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9220z/>

金髪巨乳はお嫌いですか？

2011年12月28日21時47分発行